

速報第3763号 R6.1.10発行 総務課 扱	道議会における質疑・質問及び答弁要旨	6年 文教委員会 1月10日	質 問 者	広田 まゆみ 委員 民主・道民連合 (札幌市白石区)
質 疑 ・ 質 問		答 弁		担 当 課
<p>一 「令和5年度全国体力・運動能力、運動習慣等調査」調査結果のポイントについて (一) 調査結果の概要について 1 これまでの取組と評価について 12月22日に公表されました「令和5年度全国体力・運動能力・運動習慣等調査」の結果について、本道の体力合計点は、小中学校男女いずれも全国平均を下回っているものの、一方で、昨年度から上昇傾向にあり、全国との差が縮小しているとのことであります。 令和5年度の政策基本評価におきましても、体力・運動能力の向上は、「やや遅れている」とされてきましたが、北海道のこどもたちの体力・運動能力が低い要因を、道教委としてどのように分析し、これまで、どのように対応してきたのか伺います。 また、上昇傾向にある要因について、これまでのどのような取組が効果的であったと認識しているのか伺います。</p> <p>(指摘) 今、お話しされたように、授業で「できた」「わかった」を実感した割合が低いという課題に対しての対策として、体育授業の充実に道教委として力を入れてこれられたと思いますが、授業以外の1週間の総運動時間が短い、スクリーンタイムが長いという課題に対して、ある意味、非日常ではございますが、過去には、社会教育施設を使つての合宿などもやられており、これまではそうした取組がされていたと思いますが、授業以外の1週間の総運動時間が短い、スクリーンタイムが長いという課題に対しての対策がないということを指摘させていただきたいと思ひます。 もう一つ、北海道の幼児教育関係の方や、保護者の方と話した時に、私自身は、子どもたちの外遊び環境の保障というものをすごく大事に進めていきたいと思ひてお話しをするのですが、意外に「北海道は自然にあふれているから、北海道の子どもたちは、都会の子どもたちより遊んでいるんでしょ」と思ひ込んでいる保護者の方が多いというふうに思ひますので、子どもたちの北海道における課題というものをきちんと共有していくことも必要なのではないかと考えているところであります。</p> <p>2 地域的な特徴について そこで、地理的な特徴があるのかどうか伺ひていきたいと思ひますが、もう一つよく言われるのが、北海道は雪が降るから外に出ないのではないかと、通学では車で送り迎えする率が高いのではないかとおっしゃる方もいますが、いわゆる、都市型であるところと、そうでないところなど、積雪との関連性や、通学時間、方法などとの関連性なども含めて、調査の中で、地域的に、体力、運動能力、運動習慣等に、特徴や差異はあるのか伺ひます。</p> <p>(指摘) 今の後半のご答弁がとても重要だと思ひますが、これまで体育の授業を一生懸命強化していくことで成果を上げられてきましたが、一方で、授業以外においても年間を通した取組や、子どもたちが体を動かす環境の整備を進めている例などが見られ、そうした取組の工夫によって成果が現れているというご答弁でありました。私自身の提案として</p>	<p>(健康・体育課長) これまでの取組等についてでございますが、全国体力・運動能力、運動習慣等調査におきまして、本道の児童生徒は、調査開始以降、毎年度、体力合計点が全国平均より低い状況にございまして、その要因については、一概には特定できませんが、これまでの調査結果を全国と比較いたしますと、体育の授業で「できた」「わかった」を実感した割合が低い、体育授業以外の1週間の総運動時間が短い、ゲームやパソコン等を見るいわゆるスクリーンタイムが長い、などの特徴があげられるところでございます。 道教委では、児童生徒の体力等の向上のため、小学校においては、平成25年度から体育専科教員、令和2年度から体育エキスパート教員を順次配置するとともに、中学校におきましては、令和3年度から授業実践スペシャリストを指定をし、昨年度から各管内に配置するなどして、各学校における体育の授業改善を進めてきたところでございまして、こうした取組により、本年度の体力合計点が、小・中学校男女いずれも前年度から上昇し、全国平均との差もわずかながら縮まったものと考えてございます。</p> <p>(健康・体育課長) 地域による特徴についてでございますが、これまでの調査結果からは、都市部・郡部双方において、体力合計点が高い地域と低い地域があり、また、積雪等の関連も認められないことから、地域性による差が生じている状況ではないと考えてございます。 一方で、体力合計点が高い地域や学校では、体育の授業において、子どもたち一人一人の課題に応じたきめ細かな指導を実践することや、授業以外においても、体力づくりのための年間を通した取組や、運動に親しむことのできる環境の整備を進めている例などが見られ、そうした取組の工夫によって、成果が現れているものと考えております。</p>	<p>健康・体育課</p> <p>健康・体育課</p>		

質 疑 ・ 質 問	答 弁	担 当 課
<p>は、全国平均に追い付くことがいいのかどうかは別として、政策評価においても体力の向上には遅れが見られると言われているので、子どもたちの育ちを応援していくという点において、体育の授業を強化するだけではだめなのではないかということで、今後の取組について、このあといくつか質問させていただきます。</p> <p>(二) 今後の取組について</p> <p>1 学齢前からの遊び環境の保障について</p> <p>今の後段の御答弁がとても重要だと思うのですが、結果としてこれまで体育の授業を一生懸命強化をしていくということで成果を上げられてきましたが、一方で授業以外においても年間を通した取組、子どもたちが身体を動かす環境の整備を進めている例などが見られ、そうした取組の工夫によって成果が現れているものという御答弁でありました。私自身の御提案としては、体育の授業を強化するだけでは、なかなか、全国平均に追いつくのがいいのか悪いのかは別としても、子どもたちの育ちを応援していくというところで、体育の授業を強化するだけでは、ずっと政策評価でも体力の向上には遅れが見られると言われているので、それではだめなのではないかということで、今後の取組についていくつか質問させていただきたいと思えます。</p> <p>私としては、この間、自然保育を導入しているこども園、保育園、いわゆる森のようちえんなどの現場を拝見して、自治体の皆様とも意見交換をしたときに、必ずしも、体育の授業の改善だけでは、子どもたちの体力が上がっていかないのではないかと感じているところです。</p> <p>一つ子どもたちの外遊び環境保障の実践例をあげますと、安平町のほくらのあそび場プロジェクトというのがありまして、小学校2年生が学校の授業の一環として、子どもたちと一緒に、本当にゼロのところから園庭のデザインづくりに参加をしています。</p> <p>その際に子どもたちは、ただこれがいい、あれがいいということではなく、飛ぶ、跳ねる、降りる、登るなど、子どもの遊びに有効な約40の動作を学んで、実際にある遊具や、あるいは子どもたちから出されている希望のデザインなどを実際にそれが本当に効果があるのかということをチェックします。その後、こども園の園庭づくりに参画した小学生たちは、自分たちはこども園の園庭の主人公ではないので、じゃあ自分たちの小学校のグラウンドの遊具の在り方も、自ら検証して、提案を始めたと言っています。まさに、運動習慣等の確立につながる学びではないかと思えます。</p> <p>もう一つ、私自身が森のようちえんなどの外遊びを大事だということを皆さんに御提案を続けているのは、体育の授業やスポーツの中では、なかなかできないチャレンジが、日常の外遊びの中にあるからです。</p> <p>例えば、体育の授業で、これも実際に現場の方からお話を聞いてきたのですが、跳び箱の授業を思い描いていただきたいのですが、跳び箱を飛ぶときに、3段、4段、5段と、皆さん順番に飛ぶわけですが、その間は並んでいる時間ももちろんあるし、その3段、4段、5段と上げて飛ぶために、いろいろ考えたり、諦めずにチャレンジしていくのはよいと思いますが、森や自然の遊びの中では、自然に段差とか山とか、飛んだり跳ねたりするところがあるのです。自然の中で走ったり飛んだりするときに、その子どもたちの状態とか筋力とか、運動能力に合わせて、逆に3.127段とか、自然の中では3段、4段、5段ではなくて、その子どもたちに合わせた3.1237段とか4.7段とか、日常の中でちょっとずつ筋肉や運動能力を鍛えることができるそうです。そうした外遊び環境を、しっかり学齢前から整えていくことが必要ではないかと思っています。</p> <p>ちょっと長くなって恐縮なのですが、スウェーデンの6万人規模の自治体のプレスクールを、もう10年くらい前になりますが見学させていただいたことがありました。そのときに御説明いただいたのは、</p>	<p>(義務教育課幼児教育推進センター長)</p> <p>幼児期における遊びなどについてであります。幼児期においては、様々な遊びや生活を通して、体を動かす楽しさを味わい、幼児が自分の体を大切にしようとする気持ちを育むことが重要であり、各幼児教育施設では、園庭などの環境に配慮しながら、遊びを中心に、幼児の主体性を大切にする指導を行っております。</p> <p>道教委では、こうした幼児期の経験が小学校以降の学びにつながるよう、国の事業を活用し、義務教育開始前後の5歳児から小学校第1学年の2年間のいわゆる「架け橋期」のカリキュラム開発に向けた実践・検証を行う「北海道版幼児教育スタートプログラム」事業を、道内の2つの自治体で実施しております。</p> <p>また、幼児期の遊びと小学校以降の学習との連携の在り方については、今後、大学教授等の学識経験者や幼児教育関係団体、幼児教育推進センター等で構成する「北海道幼児教育推進協議会」において、協議していくこととしております。</p>	<p>義務教育課</p>

質 疑 ・ 質 問	答 弁	担 当 課
<p>子どもの頃に、森など外での遊びだとか散策経験がある人は、大人になっての生活習慣病のリスクも低いという研究結果も教えていただきました。</p> <p>北海道と気候風土もよく似ているスウェーデンでは、もともと、森への親しみが強い国民性なんです。が、移民国家なので、例えば、アフリカや中国など外遊びが危険だと考える地域の人たちにとっては、実際に子どもの事故は、外よりも屋内で起こっていることだとか、先ほどもお話ししたようなエビデンスを大学の研究機関と連携してしっかり伝えながら、そこのプレスクールではお昼寝も外です。零下15度を下回ったら、屋内に入りますが、それ以外は外で過ごすような、防寒具や乾燥する設備などが、プレスクールの中に備えられていました。ずっと北海道の子どもたちの体力向上の話を言われていて、体育の授業の改善などで絶対伸びてきていますが、他の人がイメージする北海道は、子どもたちが外で思いっきり群れて遊び回っているという状況だと思ふのです。現実決してそうではないということ。を、逆に北海道の強みとして生かしていくのかということ。を考えますと、北海道においても学齢前からの外遊び環境の保障を充実するとともに、幼小中が連携して、子どもたちが、世代を超えて群れて遊べる環境をしっかりと保障することを、北海道の子どもたちの体力・運動能力、運動習慣等の向上の土台として、道教委としても、さらに、優先順位を上げて、実施に向けて動くべきではないかと思ふますが、見解を伺います。</p> <p>また、私は、広域自治体の道として、道としての自然保育とかそういうところの制度化とかは遅れているのですが、現場の自治体の実践は進んでおりますので、そうした先進自治体などを抽出して、大学など教育機関と連携し、外遊び環境の保障と、子どもたちの学力や体力向上との因果関係について、先ほどスウェーデンでも、子育てを言えばわかるでしょうではなく説明して、こういう効果があるというエビデンスに基づいた子育て環境の充実していくための具体的な調査・研究などを検討するべきと考えますが、あわせて見解を伺います。</p> <p>(再質問)</p> <p>まず、指摘させていただきたいと思いますが、確かに各幼児教育施設などでは遊びを中心に、指導方針にも書かれていますから、遊びを中心に幼児の主体性を大切に指導を行っているということになりますけれども、他の県ではもう既にいくつかで、子どもたちの外遊びを保障するための環境整備、森林環境譲与税なども使ったりした環境整備への支援だとか、そもそも外遊びをするためにも人材育成が必要なので、遊びを指導するというか、子どもたちとともに遊びこめる人材づくりが必要なので、そうした人材育成についても県としての支援制度が確立しつつあるということ。を改めて指摘させていただきたいと思ふます。</p> <p>改めて中身について伺いたいと思ふのですけれども、実践・検証を今行われているという北海道版幼児教育スタートプログラム事業を、道内で2つの自治体で実施されているという御答弁だったので具体的などういった中身なのか、何を求めて何を目標しているのかということ。を伺っておきたいと思ふます。</p> <p>2 アウトドア教育の検討について</p> <p>大変重要な取組だと思ふますので、私も現場も含めて勉強させていただきたいと思ふのですが、ここで大事なところはですね、小学校1年生問題というか1年生の壁というのが大きな問題だったのですけれども、それを誤解を恐れずに言うと、子どもたちが思いっきり外で遊びこめる自主的で創造性ある子どもたちが育ってきたときに、今の学校教育の枠組の中で、そこに収まりきれいな子どもたちをつくるためのプログラムであってはいけないと思ふますし、決してそういう位置付けではないと思ふますが、今まで子どもたちの外遊び環境ということで、学齢前の子どもの外遊び環境の保障について御</p>	<p>(義務教育課幼児教育推進センター長)</p> <p>幼児教育スタートプログラム事業についてであります。この事業は、義務教育開始前後の5歳児から小学校第1学年の2年間、いわゆる「架け橋期」の教育・保育の内容や方法を工夫し、全ての子どもの学びや生活の基盤を育むことを目的として、幼児教育施設や小学校等のほか、福祉関係機関等との情報共有や活用のカリキュラム開発・実践等を通して事例を蓄積しながら「接続に関わる課題」の解決方法を研究し、幼小接続の円滑化プログラムを策定するものであります。</p> <p>令和4年度からえりも町で、令和5年度からは佐呂間町で実施しており、このうち、えりも町では、現在、小学校の教務主任等と幼児教育施設の保育者が基本的な指導の方向などを情報共有し、その上で、幼児教育施設や小学校、教育委員会、診療所医師等で構成する町の幼小接続ワーキンググループ会議で「架け橋期のカリキュラム」の内容を検討するなどしております。</p> <p>(学校教育監)</p> <p>野外等における体験活動の充実についてであります。学習指導要領では、自然の中で、集団宿泊活動などの平素と異なる生活環境にあつて、子どもたちが自然や文化などに親しむとともに、よりよい人間関係を築く集団生活の在り方などの体験を積むことは、学校における学習活動の充実・発展や、子どもの自己肯定感の向上などの高い教育効果が期待されると示されておりまして、その関係性が一定程度整理されているものと理解しております。</p> <p>道教委では、これまで道内の小・中学校で実施されている米作りなどの農業体験活動や、地元の漁港での漁業体験、地元企業の協力によるラフティング等の体</p>	<p>義務教育課</p> <p>義務教育課 健康・体育課 社会教育課</p>

質 疑 ・ 質 問	答 弁	担 当 課
<p>質問してきたのですが、最後にですねアウトドア教育についての御提案を含めた御質問をさせていただきたいと思えます。</p> <p>先ほど、プレスクール、いわゆる幼稚園ですね、その研修視察で、スウェーデンを訪問したことをお話しましたが、その際に、あわせて見てきたのが、小学校、中学校におけるアウトドア教育の実践です。これは、ただ外に行くと言うのではなく、理科や数学、そして国語の文法の時間でしたけれども、それも外で学ぶ教育法が確立していました。</p> <p>例えば、円周と円の面積であるとか、物理の慣性の法則などを、雪の中や、枝や落ち葉を使って、実際に外で体感した後、公式や理論を学ぶのです。</p> <p>さらに、実際に落ち葉を集めてきて、地球温暖化との関係や、なぜ私たち人間が科学を学ぶのかという哲学的なところも含めて学んでいくというプログラムになっていました。</p> <p>基本的に、日本の学習指導要領のようなものではなく、逆に現場の方から学習指導要領がないので教師の負担が多いという声を聴いたのは、ある意味私にとっては意外でしたが、そのアウトドア教育を進めるために、教科書が確立をされていて、大学からの教員養成のためにか、指導養成のためのサポートがあるのです。</p> <p>すべての人が必ずしもアウトドアがよいというわけではありませんが、いわゆる不登校の子どもたちの中でも、こうしたアウトドア教育で国語や数学や理科を学ぶことが楽しいと感じる子どももいるかもしれません。</p> <p>また、実際に学習効果に関しても、アウトドアで学んだ方が、脳内への二酸化炭素量が低く、例えば文法とかも体を使って覚えるので、記憶しやすいという調査結果も教えていただきました。</p> <p>これまで、学齢前の外遊び環境の保障について、私もずっと自然保育や森のようちえんなど、議会議論を重ねてきました。</p> <p>残念ながら、なかなか道としてそれが進んでおらず、さらにこの学齢期というのはハードルが高いかもしれませんが、この北海道としてのアウトドア教育についても、ぜひ、検討をいただけないかと思えます。</p> <p>基本的に、幼小中の遊び、学びの現場、基礎自治体である市町村が主体であることは承知をしていますが、広域自治体の道として、アウトドア教育など、北海道ならではの学びのスタイルの確立のために、海外の大学などとの連携も視野に入れて、より先進的な調査研究に力を入れるべきと考えますが、見解を伺います。</p> <p>また、海外の研究では、子どもたちの体力の向上だけではなく、学力や創造性、自己効力感やコミュニケーション能力の発達の増加など、AIや機械には決してできない、人間ではできない能力を使うために、この外遊び、アウトドア教育というのを意識的にやっているというところも出ています。</p> <p>体育の授業をがんばるだけでは、効果があがらないように思います。アウトドア教育の中学校、まあ高校については事前に言っているものであれですけれども、アウトドア教育のモデル的な導入などについても検討すべきと考えますが、見解を伺います。</p> <p>(指摘)</p> <p>今ご答弁いただいた後段のところは、いわば総合的な学習の時間の中身ですね。</p> <p>私が申し上げているのは、教科教育そのものの在り方を、北海道モデルで検討するべきではないか、特に事前には高校の話とかはしなかったわけですが、特に先進的に進められている自治体だとか、幼小中とさまざまな実践が進められている地域と、それを受け取った高校がどうするかだとか、そうしたことも含めて、教科教育の学びの中で、子どもたちがしっかり体力だとか体験をしっかりとするという教科教育の在り方についても検討いただくよう指摘を申し上げ、新年最初の質問とさせていただきます。</p>	<p>験活動など、地域の教育資源を活用した体験活動の実践例を全道に周知することとしておりまして、今後も、各学校において豊かな体験活動が体系的・継続的に実施されるよう教育課程の工夫改善について指導助言してまいります。</p>	

